

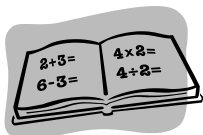
知恵の樹

No.115 2006. 11. 30

町田の図書館活動を
すすめる会

事務局: 町田市森野 3-1-12
FAX 042-722-1243 増山

「教育というボートに乗った子どもたちを一人たりとも落とさない」



— フィンランドの旅・教育現場と図書館をめぐる —

この夏、教員対象の体験学習でフィンランドのヘルシンキに5日間滞在する機会を得ました。未知の世界に足を踏み入れて味わった喜びと感動は一生忘れられません。ありのままの現代風俗や文化に直接ふれてみて、フィンランドの人々が大好きになりました。また、ツアーで知り合った小学校や中学校・高校の先生方との出会いも私の宝物です。

50代にして初めての海外旅行。いきなり北欧です。コツコツ、しこしこ教育の仕事、家庭の仕事(育児と介護)を続けて一段落した自分にご褒美です。別世界に身を置いてリフレッシュしたい。それに何と言っても日本以外の国の教育施設や公立図書館を訪問できるなんて! 私のこれからの仕事に生きる素敵なヒントがあるのではとの期待もありました。

訪問先はヘルシンキ市からバスで約1時間程度の周辺にある施設です。初日はヴァンター市のミッコラン総合学校(9年制小中一貫校)、ルモン高校、NOA(児童青少年センター)です。障害のある子どもや移民・難民の子どもたちのための特別支援教育に重点を置いた学校です。特別に支援が必要との判断は、保健所が3歳児検診で発見に努め、その段階から保健師や福祉関連のスタッ

フが親の相談相手になっているのです。ですから日本のような「小1プロブレム」はありません。軽度発達障害(学習障害、高機能自閉症、注意欠陥多動障害)の子どもも脳機能の状態や特性を把握して医療スタッフや臨床心理士、青少年カウンセラーが親や担任教師をバックアップしています。授業参観中、パニック(キレル)状態は全くありません。移民の子どもたちは、母国の文化を尊重する教育とフィンランド語の教育を特別に受けます。

もちろん、いじめや不登校、ニートもないわけではありません。ただ、子どもたちや両親の様々な問題へのアドバイスは学校だけでなく生涯にわたって国家のシステムとして全ての国民に保障されているのです。なぜ、「OECD(経済協力開発機構)生徒の学習到達度調査」でフィンランドが全ての項目でトップになったのかわかりました。落ちこぼれを少なくし、人口500万の国民一人一人を大切にし、十分に能力を発揮できるようにすることがこの国には必要だからです。

アフガニスタン、ナイジェリア、バングラデシュ等々移民クラスは多彩です。通常クラスとも交流し、早い子は1年経たずにフィンランド語を覚え、通常クラスに入るそうです。

「教育というボートに乗った子どもたちを一人たりとも落とさない」というフィンランド政府の教育政策の典型を見、胸があつくなりました。

2日目、エスポー市のメリウスバ小学校を訪問しました。就学前幼児のプリスクール、1～2年生の小学校クラス、移民クラス、小学校入学を見合わせたスタートクラスのみ先進的実験校です。ひとり一人の子どもを力を引き出し家庭的な雰囲気、他の小学校への転入をスムーズに行えるような配慮がされているので、発達の遅れた子どもも親の虐待から未然に守られているのです。

全国から多くの教師が専門的研修のために訪れます。成果が認められています。

校長先生はピンクのワンピースが似合う小学2年生のママです。「わたしは、担任が一人で悩みを抱え込まないチームワークを大切にします。毎日授業観察しながら具体的に指導法の工夫を学び合えるようにしています」。

金髪の髪が肩にかかり、若く美しく情熱にあふれた魅力的なリーダーの言葉を聞きながら、思わず「日本にもこんな校長先生がいたらいいのね・・・」とつぶやく声が聞こえました。わたしは、心の中で“日本の先生も素敵です。わたしたちはもっと自信を持ちましょう”と、考えていました。

子どもたちはみんな生き生きして、車椅子の子どもと共に学んでいました。少人数に指導補助員や特別支援教諭が付き、また子ども同士の教え合いもあり、椅子の配置、教材教具の工夫など、専門的、家庭的な教育の実際がよくわかりました。

例えば、1年生の読み聞かせや算数の話し合いの場面では10人のお互いの顔が見える半円形の配置で集中を高めていました。

午後はレッパバーラ図書館を訪ねました。新興住宅街に近く、ショッピングモールに隣接して建てられた新しい図書館です。小学校のすぐそばにあり、授業中クラス単位で調べに来たり、放課後の児童のくつろぎの場にもなっています。地域文化センター的で、ヤングアダルトコーナーは大人の部屋と独立し、しかも目が届くようにしきりが透明です。またスタジオやネットのコーナーがあり、朗

読、演劇、演奏などイベントにつながる活動ができます。

フィンランドは世界でも屈指の図書館利用率の高い国で、国民の読書量は多いということです。身近に無料で利用できる図書館が学校区単位であり、学校図書館と公立図書館が一つのカードで利用できるというのも、うらやましく思いました。

読み聞かせのコーナーや幼児用図書コーナーも明るく広くデザインが素敵です。

外国コーナーではMANGAの表示があるコーナーに日本のドラゴンボール等人気漫画が翻訳してありました。残念ながら文学作品は2冊しかありませんでした。

その後WSOY書店で教科書を見ました。どの教科書も写真や資料が豊富で美しいのに驚きました。国語の教科書が学年で2種類あるのです。一つは特別支援教育用で、同じ内容の教材文なのに質問量や表現量を加減して子どもの力に合わせて達成感を持つことが出来るのです。きめ細かい配慮に驚きました。

話が長くなってしまいました。3日目以降は省略します。最後に私の失敗談をお話しましょう。

「ムーミンの国に来たのだからフィンランド語の本を」と思い、1冊買いました。ホテルにもどり、日本人の通訳の方に「この本の題は何ですか？」と尋ねたら、「ごめんなさい。これはスウェーデン語なのでよくわかりません・・・」。

600年間スウェーデンに統治されていたこと、また、1800年代には一時ロシア帝国に占領されたこともある国の歴史の重さが垣間見られました。フィンランドの国立博物館は無料でしたがずっしりと心に残ります。先住民も含めた自国の文化と歴史に誇りを持ちながら、侵略した国も含めて共存していこうとする逞しさ・心の広さは、さすが「サンタクロース」発祥の国。

日本とは全く自然環境も人口も文化も異なる遠い国です。国の問題も異なるでしょう。けれども戦いで沢山の命を失った歴史を持ち、平和を愛する国として共に力を合わせられると心から思っています。(ひろせゆみこ／町田市図書館協議会委員)

～ 町田市民文学館の「市民」って? ～

勘解由小路 承子



この10月27日、町田市民文学館ことばらんどが開館、10時から開館記念式典が行われた。読書週間の初日であり、法にも定められた文字・活字文化の日でもあるこの日を「選んだ」ということだ。私は、図書館協議会委員の一人として出席した。

第一部の1階文学サロンでのテープカットに続き、第二部の2階大会議室での式典では、教育長からの経過報告、市長、教育委員長からの挨拶、黒木一文市議会議員、伊藤公介衆議院議員(秘書代読)、小磯善彦都議会議員、文学館開設準備懇談会会長の森村誠一さん、資料寄贈代表者として遠藤順子さん(故遠藤周作氏夫人)、名誉館長となった寺田和雄前市長の来賓祝辞と1階文学サロンの壁面に設置された文学マップを寄贈したソロプチミスト町田一さつきへの感謝状の贈呈などがあった。

教育長の経過報告では、この文学館が構想・計画の段階でいかに市民の意見を反映させようとしたか、また挨拶や祝辞では、独自性のある文学館がめざされたということが繰り返し強調された。

具体的には、町田市にゆかりのある作家にはこういう人がいますというような文学館ではなく、市民が積極的に参画し、市民が創り、市民の言葉による表現活動の拠点であり、特に若い世代を対象にした事業を積極的に展開していきたいということだった。しかし、式典のありようや施設や備品などには、そういったことはほとんど反映されていないというのが率直な感想である。

1Fフロアは、ざらざらしたレンガを床材としており、真ん中に絵本書架が配置されているが、とても子どもが座り込んでゆっくり絵本を読めそうもない。それに、子どもが転べば、柔らかい肌には治りの悪いすり傷を負いそうでもある。そら豆型の書架がどこか孤島のようにも感じられた。

あるいは、市民の言葉による表現の拠点をめざすなら、文学館に入っただけで来館者の目に入るところに、市民団体や大学・高校のサークルなどが手作りの冊子や同人誌を気軽に置けるコーナーがあってもいいように思うが、出版社に認められた市内在住の作家の書籍の展示はあっても、そういった冊子が置ける雰囲気はない。

また、来館者用の一時置きロッカーはあっても、市民活動には必須とっていい団体用のロッカーもない。

式典第三部は2階展示室の内覧会で、俳優の中村万理さんによる展示された作家の作品のギャラリー・リーディングが行われた。しかし、ギャラリー・リーディングは会場がざわつくまま始められ、心ない中座者にもかき乱されてしまった。展示も、多くの招待者はざっと眺めただけのようだった。

第二部式典の会場である2階大会議室いっばいに並べられた椅子の数から考えると、招待された人は約120人超といったところだが、そこにはこれまで文庫やおはなし会など地道に市民活動をしてきた人たちの姿はなかった。招待された地域の名士たちからは一定の評価は得られても、はたしてどれだけ「市民」の参画を期待するのか少々心もとない町田市民文学館の船出である。

(かでのこうじ ことこ 会員)

さるびあ図書館で、今注目を集めているのは、返却カウンター横にある展示物コーナーです。

四季折々の季節に合わせた本の展示と、さまざまな絵や折り紙、また自然からの授かりものも飾り付けています。

例えば、竹の籠にどんぐりを入れたり、夏にはせみの抜け殻を置いたこともありました。また、中秋の名月に合わせてススキを立てかけさらに発泡スチロールでおだんごをこしらえ積み重ねて雰囲気を出しました。こうした職員の創意工夫で子どもたちは大喜び、大人の方もしばし足を止めておられます。

その飾り付けの中にいつもいるのが、絵本でおなじみのキャラクター、グリとグラです。のねずみがモデルで今日もどんぐりや絵本の横を散策しています。さらにもう一対グリとグラの人形があります。少し大きめの初代グリとグラです。いつもリュックを背負ってベンチに腰かけています。絵本に忠実に毛糸で編んだものです。

さるびあ図書館は、児童サービスの拠点として位置づけられています。文庫や読書会、さらに小学校、保育園などの団体登録を受付け、児童本を中心に長期に大量の貸出をしています。また、除籍された児童の再利用本についても各館から寄せられたものを常時提供しています。各地域文庫や学校図書館などで活用されています。

もうひとつ、さるびあ図書館には移動図書館車が2台（堺図書館にも1台）あります。市内の各図書館から遠い地域に60箇所を超えるサービスステーションを設け、図書館サ

ービスを行っています。ここでも、絵本などの児童本の貸出がかなりの割合を占めています。

児童サービスというと、何といてもおはなし会です。現在は全国的に図書館の主たるサービスのひとつになっていますが、町田の図書館においては早い時期から職員とおはなしボランティアの方々が協力して創りあげてきた歴史があります。

現在ではさらに乳幼児を対象に月に1回ほどやさしい絵本を使ってのおはなし会を行う展開を見せています。

さらに将来への図書館構想として、さるびあ図書館は課題を持っています。それは、市民病院内に設ける予定である患者さんを対象とした図書館の設置計画です。建設に向けて、病院サイドとも細かな部分まで条件を詰めてきた経緯があります。前例も少なく難しいサービスかもしれませんが、病気になった人たちにとって読書は、心を癒し、元気になろうという勇気を与える何ものにも替えがたい楽しみなのです。予算的にもそれほど大きいものでもないと思われ

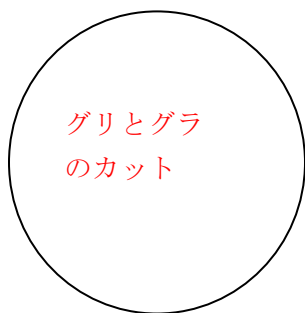
ますし、何といても斬新的で市民に好感を持たれこそすれ、お叱りを頂戴することはないと思います。一職員としてもぜひ病院図書館が実現してほしいと願っています。

そして、いつの日かそのカウンターの横に、3代目グリとグラが並んで患者さんの目を楽しませんことを目標として、市民サービスに努めていきたいと思っています。

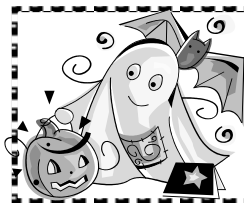
どうぞ、グリとグラに会いに、さるびあ図書館にいらしてください。

（なかやまけんいちろう 職員）

“グリとグラ”のいる さるびあ図書館へ ようこそ！



文とカット 中山憲一郎



「声の世界から文字の世界へ」

まちだ語り手の会が実践報告

去る 10 月 28 日(土)14:00~17:00、都庁の都民ホールに於いて、1部:みなみらんぼう氏の講演「輝くことば」、2部:三鷹市文庫連絡会、まちだ語り手の会、練馬区立光が丘図書館3団体による「子ども読書活動実践団体活動報告」が行われた。これは、昨年「文字・活字文化振興法」が制定された10月27日を「文字・活字の日」とし、それにちなんで開催されたもので今年で2回目となる。

2004年に文部科学大臣賞を受賞した団体として、都庁で行う文字活字文化フォーラムで活動報告をしてもらえないかと都立図書館から依頼を受けたのは、九月末。打ち合わせは10月に入ってからで本番まで3週間という短期間で果たして準備出来るかどうか迷ったが、活字文化に親しむためには、まず耳からたくさんの物語を聞くことの大切さ、「声の世界」を抜きにして「活字の文化」を楽しむことは出来ないということ、つまり、我々の活動を知っていただく良い機会だと捉えてトライすることにした。

講演者のみなみらんぼうさんは、「山口さんちのつとむくん」で知られているシンガーソングライター。幼い時の田舎で育った思い出と、よく話をしてくれた祖母のことばと風景が重なるというお話に、耳から聞くことばで膨らんでいく想像の世界—ことばの力を再確認すると共に、我々の活動のプロローグを聞くようであった。今は、スローライフを楽しみ、登山や世界を旅する冒険家としても知られている。

「三鷹市文庫連絡会」からは代表がひとりで資料を作り一人で報告をされた。皆、すでに先約があり参加できないのだという。もっと早く決まっていたら、とさかんにぼやいておられたが、パワーポイントで図書館との協働を含めたたくさんの活動を報告された。会場には、三鷹図書館の職員が聞きに来られているとのこと。

まちだ語り手の会の報告のタイトルは「声の世界から文字の世界へ」。1団体の持ち時間はたつ

た30分であったが、報告者は3人まで可とのことで、シナリオをつくり、事務局の市川さんにパワーポイントを作ってもらい、伊藤さん、平田さん、増山の3人で臨んだ。

初めに、秋のおはなし「小判の虫干し」を聞いていただき、写真とグラフ等を投影しながら、次々活動を紹介していった。子どもたちからの感想文を交えての学校でのおはなし会、不特定多数の子どもを対象にした自然の中のおはなし会の数々、また障害児へのおはなし会や行政との協働活動、読書ボランティアを対象とした養成講座の開催について等々、物語を耳から聞くことによって、おはなしを楽しみ、それが想像力や豊かな言葉の育む力となり、さらに読書の世界へと導く力となることを報告。

「練馬区立光が丘図書館」は、図書館員が一人で、障害者サービスの一環として行っている手話によるお話「おじさんのかさ」「スミィ」を実演。最後に「サザエさん」の歌を手話指導し、会場の人たちと歌って3時間に亘るフォーラムは終了した。俄仕込みの報告であったが、改めて我々の活動の多様性を再確認する良い機会になったと思う。この活動報告を、皆様にもいつかぜひ見ていただきたいと思っている。(増山)



第21回のつた丘の上秋まつり

11月3日(祝)10:00~15:30/野津田公園ヤマナラシ広場に於いて、19の団体が参加して自然を満喫した恒例のお祭りが好天の中賑わった。すすめる会からは、伊藤、増山、島尻、主催者側でもある久保、の4名が参加。

木々の色づきにはまだ早かったが、季節は間違いなく気持ちの良い秋。顔なじみの人も増え、同じシートで「おはなし会」をするまちだ語り手の会の仲間と本を並べて一日楽しく遊んだ。そしてそれぞれが素敵な手作り人形を買い求めた。(わたしは、赤毛のアン。今、机上にいる)

今回のメインイベントは、最後に焚き火を囲んで行われたアイヌの人のお話。カムイを神という言葉で表現できない意味合い、イナウについてなどを教わり、行者にんにくを根こそぎ採ったため罰が当たる「ブクサの魂」というアイヌの昔話を古市さんの語りで聞くことが出来た。満足！満足！M!



町田の学校図書館を考える会

*「子どもの本」連続講座 第3回

10月28日(土)1:30~3:30 中央図書館6階会議室

出席 6名 岡山のビデオ「本があって、人がいて Part 2」を見た後、学校図書館や教育をめぐる問題について語り合いました。折しも高校での未履修問題やいじめ自殺問題が頻繁にニュースに取り上げられている時で、話題は勢いそちらにも向かいました。社会のひずみが教育現場を直撃している、そんな印象を持ちます。そして犠牲になるのは子どもたちなのかと。

途中から児童サービス担当の渡部さんがみえられ、団体貸出の現状について率直な意見交換をすることができ、とても有意義でした。

*三鷹第六中学校図書館見学(中教研主催)

11月21日(火)14:30~16:30

中教研図書館部会主催の図書館見学会に指導員5名も参加させていただきました。三鷹市では2002年度にすべての小中学校の図書館整備事業が完了し、居心地のいい明るい図書館、400万円の予算増額での文科省図書標準の達成、パソコン管理システムと物流、そして司書の配置が出来上

がっています。中でも第六中が一番広い図書館ということで、広々としたゆとりのある空間、やわらかくカーブした低書架、ソファや木目のきれ



いなテーブルなどに思わずため息が漏れてしまいます。ネットワークと物流ができたことで公共図書館からの団体貸出よりむしろ学校間での資料の貸出が活発になっているという話からも、資源の有効利用としてのネットワークの重要さと価値を確認しました。ただ残念なことにここ2・3年授業での図書館利用は減少してきているとか。また毎土曜日の4時間勤務がいくらか負担になっている現状についても考えさせられました。学校図書館作りがモノ・カネ・ヒトだけの整備に留まらず、それが出来上がってもなお幅広い支援を必要とする現状を感じました。私たちが求める学校図書館の充実とは、とりもなおさず学校図書館を中心とした教育の実現にこそ、その目的があるのだと改めて確認した次第です。

町田市立図書館協議会より

*おとなのための図書館活用講座 「文字のよみ を調べる」

11月11日(土) 14:00~16:00 中央図書館6階ホール 参加 44名

今回が初めての試みとなるレファレンス講座は、老若男女を集めて盛況でした。特に年配の方々が多かったようです。前レファレンス担当の近藤さんはじめ担当の職員の方のご尽力で、丁寧な資料とパワーポイントによるわかりやすいビジュアルが用意され、受講者はとても真剣に耳を傾けていました。終了後のアンケートにも、今後もこういった講座を開いてほしいとの希望が寄せられ、市民のニーズを感じました。

*病院患者図書館についての要望書提出 11月17日 協議会委員が教育長に面談/教育長室にて

図書館協議会ではかねてより、町田市民病院に置かれる予定だった病院患者図書館の変更について討議を重ねてきました。そして市民はもとより病院職員にとっても期待されていた病院患者図書館の実質的廃止(病院独自会計での図書館運営は可能とはいえ、財源的な保障もないなかではほぼ廃止になりかねない)は、市民病院の質的低下および患者の人権に関わる重大変更であると捉え、当初の計画通り病院患者図書館を市立図書館の分館として位置づけ設置することを要望書として提出しました。図書館は利用できる人ばかりでなく、利用の困難な人々への積極的なサービスを重要な責務としています。また小児入院患者などにとっては市立図書館の人的・物的ネットワークを背景にした支援体制はぜひとも必要なことと考えます。残念ながら肯定的な返事はもらえませんでした。なんとか実現に向け折り合いをつけていきたいと考えます。(水越)



ひろば



<例会報告>

10月26日(木)

13:00~16:30

於・中央図書館中集会室
114号印刷折込作業~例会

出席	伊藤 久保 小林
	中山 前島 増山

○ 会報について

115号内容について話合う。巻頭言は多忙な廣瀬先生に無理やりお願いする/文学館「ことばらんど」オープンの様子(勘解由小路さんの報告記事)を読んで話し合う。次号、どう市民とともに発展しようとしているのか文学館側をお願いする/各分館の様子など、図書館のアピールを。まず、さるびあ図書館から。

○ 市職労共催の講演会について。3月頃前川恒夫氏が候補に。(久保担当)

○ 世論に合わせた「特設コーナー設置」についての要望書を図書館館長に提出。今回は、子どもから大人まで分かるような憲法・教育基本法関係の資料コーナーを依頼、了承される。○ 「白ばら」関係の上映、展示は諸事情で今回は見送りとなる。

○ 病院患者図書館は、市民病院建替え第2期工事計画段階で、さるびあ図書館の分館としてオープンすることで設計に組み込まれていた。が、首長が変わった市は、病院図書館に一般財源からの予算措置をとらない方針を打ち出した。図書館協議会に頑張ってもらい、当会もバックアップをしていきたい。

○ 次回例会は12月21日(木)、1月26日(金)。

【お知らせ】

● 町田の学校図書館を考える会から/「川崎北高校(川崎市宮前区有馬3-22-1)図書館見学会」/12月13日(水)午後2時~。集合場所:田園都市線鷺沼駅東急側改札口午後1時半(タクシーに分乗)。元会員でもあり、学校司書で有名な田村さんの高校。ユニークな書架配置や配架を見学、資料も用意して下さる。問合せ水越(723-8887)迄。

● まちだ語り手の会から/「作家&語り手 宮川ひろさんの語りのひととき」12月9日(土)13:30~15:30 町田市民フォーラム和室/500円/宮川ひろさんの昔語りは、ほのぼのとした情感が溢れて、聴く人の心を癒してくれます。当日直接会場へ。問合せ:事務局 042-795-3022(市川)

● 朗読・映画・講演・ディスカッション/「平和がだいじ 子どもの考えて?」/12月2日(土)13:30~17:00/多摩市永山公民館5F ベルブホール/講演:代田七瀬(2006 子ども国会代表)、朗読:山花郁子ほか、1000円/問合せ:042-371-2286 久保

● 第17回「被爆者とつどう会」/12月16日(土)14:00~ まちだ中央公民館6F 学習室1・2/お話:「戦争協力の道に踏み込まないために—平和を作る力—」安斎育郎さん(立命館大学教授)、被爆体験:山口昇さん、DVD 上映「魔法のランプのジニー」/主催:町友会とともに生きる会/問合せ:志村(042-735-3580) 本間(044-987-4785)

● 第1回まちだ市民自治学校 メイン・シンポジウム 市民自治のまち育てをしませんか?/12月10日(日)13:30~16:30/市立中央図書館6F ホール リートーク: 崔 善愛さん、水越規容子さん「図書館が未来を拓く~大人にとっても、子どもにとっても」、大和繁さん、伊藤忠一さん、田中米司さん。アコーディオンと歌声ライブ:橋本千香子さん/パネルディスカッション: 姫田忠義さん「映画監督が見つめた基層文化」、近藤晶さん「ジャーナリストが見つめた町田」、伊藤一雄さん「自治問題研究者が見つめた都政」共通参加費1000円/主催:まちだ市民自治学校実行委員会・自治体政策集団かけはし/問:酒井 042-735-3694

● 映画「ガーダーパレスチナの詩」/2007.1月13日(土)上映開始 14:00/町田市民フォーラム 3F 観/一般 1500円・学生 1200円/主催:町田で「ガーナ」に出会う会 tora0633@yahoo.co.jp

あとがき

児図研会報「こどもの図書館」に「子どもウオッチング」欄の原稿を頼まれて「重度障害の子どもへのおはなし会」について書いた。それを読んだ福島の図書館員である知人から「公共図書館の目指すすべての子どもへのサービスについて具体的に考えなければと思いました」という葉書がすぐに届いた。このような感性を持った行政マンが増えると市民生活も変わっていくだろうにと、ふと病院図書館に思いを馳せた。ハード面はクリアしたのに、優先度が低いということで躓いているわが市の病院患者図書館だが、存命だった浪江先生と会員とで前市長に嘆願して設置されることが決まった経緯があるだけになんとも納得しがたい。平等な生活環境を公共に整えるのが行政。入院生活を余儀なくされた人にとって身近な図書館が果たす役割の大きさを考えると、他に何を優先したいというのだろう? 弱者にこそ光を! だ。(M4)